

佳作

反抗期の私

熊本県熊本市立白川中学校二年 坂田 美依菜

何年ぶりだろう。私がけんかをして泣くのは。強がりな私が涙を見せるのは。

私が中学二年生になってから、家族との関係が、ぎくしゃくし始めた。何を言われても「めんどうさい、うざい」。友達からの言葉でさえ、そう感じるようになった。いわゆる反抗期だ。そんな時、私は小さな思いがあった。自由になりたい。そんな小さな思いからあの大げんかは始まった。

「部活行きたくない、塾にも行かない。」

これが私の最初の自由にしたかったこと。しかし、母親の表情はみるみる変わり、怒りと情けなさで顔が歪んでいた。恐ろしかった。

「何でね。」

母親の淡々とした声が耳に響く。その言葉にはきつと、なぜ私を裏切るの、そんな思いがあったのだから。

う。言葉一つなのに、ずしりと重みを感じた。結局その日は一言も話さなかった。

次の日の夜、リビングから微かに母親と兄が話す声が聞こえた。私のことについて相談でもしているのだろうか。どうでもよかった。私は夕ご飯も食べず、自分の部屋にこもっていた。悲しいような苦しような気持ちに押しつぶされそう、何だか怖かった。すると、コンコンとドアをノックする音が聞こえた。兄だ。勝手に入ってきて

「ちょっと話がある。」

話したいことはすぐにわかった。今は何にも触れてほしくなくて、知らないふりをした。しかし、私は驚いた。いつも笑顔で優しい兄が私に怒鳴ったからだ。顔は眉間にしわが寄り鬼のようだった。それでも私は反抗的な態度で真剣に話も聞かず俯いていた。その時、初めて兄に平手打ちをされた。頬がビリビリ熱くなり、とても痛かった。涙がとまらなかつた。悔しかった。私は兄をにらみつけ、父親の部屋にこもり、息ができないほど泣いた。

そして、一週間程たった日、久々に母親と夕ご飯を食べた。なかなか会話ができず、気まずい雰囲気だった。しかし、驚いたことに先に口を開いたのは

母親だった。

「あのけんかの後、あなた知らないでしょ。」
もちろん知らなかった。私は黙って頷いた。

「あのね…。」

と母親が全て話してくれた。兄は、ボロボロ涙をこぼしていたそうだ。私の態度が悪く手を出してしまったと後悔したようだ。それを聞いた瞬間、私は泣いてしまった。胸がとても痛かった。兄が私を誰よりも想ってくれているとわかって涙がまたあふれた。この出来事は私が家族の愛を知れた出来事だった。何よりも兄の愛を。誰よりも優しく、責任感が強い。そんな兄が私の自慢の兄だ。反抗期だからこそ知れた、この気持ちを大切にしたい。そして、もっと家族を大切にしていきたい。そう思える出来事だった。